様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００２９０

研究課題名（和文）19世紀後半における国際的物語流通と明治文学―思軒・涙香の翻訳と新聞編集―

研究課題名（英文）International Circulation of Stories in the Late 19th Century and Meiji Literature; The Relationship between the Translations of Shiken and Ruiko and Newspaper Editing

研究代表者
馬場　美佳（Baba, Mika）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：９０４０５５４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本近代文学において特徴的な新聞と小説との関係について、とくに明治中期の小説に注目して調査・考察を行ったものである。『郵便報知新聞』における森田思軒の翻訳小説の掲載は、国際的な知識を読者に提供するために積極的に導入されていた。それは、紙面が提供する日本社会の現実を読者が批評的に理解することを可能にしたが、そのために内容や表現が高度に編集されていた。この新聞紙面と小説との密接な連動関係は、後に新聞社員として小説家となる書き手たちの創作にも影響を与えたと考えられる。研究推敲の過程で、新聞の文脈を即時的に復元したことによって、新聞小説の新たな評価の視座を得たことも成果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、19世紀後半における国際的な物語流通を背景に、新聞記事の批評として翻訳小説が密接に関係するに至ったことを、森田思軒と『郵便報知新聞』の実態から明らかにしたことである。この意味で思軒の「炭鉱秘事」はもっとも成功した翻訳かつ編集であり、この試みが新聞読者に与えたインパクトは大きかった。思軒の成功は、後の小説家たちにも影響を及ぼしているといえ、たとえば幸田露伴の「五重塔」もまた新聞紙面と連動していた。新聞小説の議論は通俗性に回収されやすい。だが、明治中期という改良の時代においては、社会的言説との関係において多様な試みが目論まれた最先端の実験場でもあったことを改めて提示したい。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and examines the relationship between newspapers and novels, which is characteristic of modern Japanese literature, with particular attention to novels from the mid-Meiji period. The publication of Morita Shiken's translated novels in the Yubin Hochi Shimbun was actively introduced to provide readers with international knowledge. It allowed readers to critically understand the reality of Japanese society as provided by the paper, but the content and expressions were highly edited for this purpose. This close interlocking relationship between the newspaper pages and the novel is thought to have influenced the creativity of the writers who later became novelists as newspaper employees. Another achievement of the research process was the immediate restoration of the newspaper context, which provided a new perspective on the evaluation of newspaper fiction.

研究分野：日本近代文学（明治文学）

キーワード：明治文学　新聞小説　『郵便報知新聞』　森田思軒　原抱一庵　新聞『国会』　幸田露伴　泉鏡花

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

明治文学の翻訳分野で著名な森田思軒、また同時期に活躍していた黒岩涙香には多くの原著不明作が存在していた。報告者は、本課題の前段階で主に思軒について調査を行い、『郵便報知新聞』に掲載された原著不明作の多くが、19 世紀後半の大英帝国の文化圏の各国における英字新聞に掲載された物語・記事から翻訳されたものであったことを明らかにしている。思軒がジュール・ヴェルヌの科学小説をはじめ、当時西洋諸国において著名だった小説を翻訳していたことは知られるが、同時に、新聞といった定期刊行物によって国際的に流通した記事を、「小説」として新聞紙上に翻訳していたことになる。すくなくともここには、自律的な文学作品であることとは異なる、意図や選択基準が想定される。『郵便報知新聞』は元来政治新聞だったこともあり、小説を掲載することには相当のマイナスイメージを伴った。しかし新聞読者が翻訳小説を通じて西洋社会に触れ、それと社説・雑報等の記事を併行して読むことは、国際的な視野において日本社会を考えるための情報リテラシーの向上のために意図された編集方法であった。そしてそれは、小説を通して国内外の社会に関心を持ち、理解し、批評するための解釈コードを提供するものとしてあったと考えられる。だが一方、こうした新聞と翻訳小説が密接に関係する事態は、当時改良が目指されていたいわゆる近代的小説をどのような性質のものにすることになったのか。そしてまた、その後、新聞社に所属しながら活躍したほかの明治中期の小説家たちの創作に影響を与えたのか、という課題が生じるにいたった。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、19 世紀後半の大英帝国文化圏における新聞記事および新聞小説供給のネットワークとの関係に着目して考察し、日本近代文学研究のための新たな知見を得ることにあった。そして、従来想定される原著・原典と翻訳物という対応関係を越えて、19 世紀後半に展開した国際的な物語の流通のなかで日本への物語の移入をとらえなおし、文学作品の国内外における展開の多様性と日本における文化的影響をグローバルな視野において描き出すこと、さらには、日本近代文学黎明期の主要な文学者たちが新聞編集にかかわっていた事実に着目し、彼らが新聞という場において志向した、文学に重点をおいた人文知形成の試みという日本的な特徴を、より具体的に明らかにすることができればと考えていた。

しかし、コロナウィルス蔓延の影響に伴い、大きく優先順位の変更をせまられることとなった。最終的には、森田思軒、黒岩涙香等の原著不明作を中心とした海外における文献調査にかえて、国内の諸新聞の状況に着目し、思軒における具体的な新聞編集作業の情報収集、かつ明治 20 年代の文学者とその関連新聞を対象とした調査を進めるよう目的を再設定することとなった。

３．研究の方法

本研究の方法については、日本近代文学研究を起点に、翻訳小説の原著を明らかにし位置付けるという比較文学的手法、新聞という近代の先進的な刊行物を対象とするメディア論的手法、さらに日本のみならず国際的な状況をふまえるための学際的な手法といったように、研究対象の実状にあわせ複数の角度からアプローチし、また、国内の各図書館・資料館のみならず、複数の海外の図書館を利用して調査を行い、なおかつ各国新聞データベースと、各雑誌・書籍の情報を対応・連動させながら研究を行うものとしていた。これにより、国内からの視野にとどまらず、また一国の状況に限定されない、19 世紀後半に特徴的な物語の移動を具体的に追跡することが可能になるという見込みのもと、(1)森田思軒訳および黒岩涙香訳の作品についての原著の解明 (2)国際的視野に立った森田思軒訳および黒岩涙香訳の新聞小説／翻訳小説の位置づけ (3)森田思軒以降の文学者と新聞編集の関係について考察するための視座の獲得、を予定していた。

しかし、前述のコロナウィルス蔓延にともない、とくに初年度末以降、優先順位を大きく変更し、(3)を主に遂行することとなった。そのため研究の方法として、岡山県笠岡市が管理する森田思軒関連書簡についての調査を検討し、思軒における新聞編集作業の実態にかんする情報を収集することとした（(4)として追加）。またあわせて国内で刊行された新聞のうち『読売新聞』と尾崎紅葉・泉鏡花、新聞『国会』と末広鉄腸・幸田露伴等に注目して調査を行うこととした。

４．研究成果

(1)森田思軒訳等の翻訳作品についての原著の解明

原著解明のための海外調査を初年度に１度行った。とくにフランス国立図書館において、19 世紀後半の主要新聞紙面の編集についての調査も実施し、思軒が積極的に翻訳をおこなったジュール・ヴェルヌおよび思軒渡欧期の新聞連載が掲載された新聞紙面も調査した。これにより、新聞紙面と翻訳小説との連動という試みが、日本独自の試みである可能性を仮説するにいたった。

思軒に関する調査の過程で、同時期に『郵便報知新聞』で翻訳と新聞編集に関わっていた原抱一庵にもやはり複数の原著不明作品がありそれらを明らかにする必要が生じたため、調査を行った。結果、「幽棲」はテオフィル・ゴーティエの「キャプテン・フラカス」、「明月」はヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」を原著としていること等を明らかにした。また思軒・抱一庵・遅塚麗水等の回想とつきあわせつつ、当時の新聞編集部の状況を確認する作業を行った。

２年目以降、海外調査を行うことが困難となったため、優先順位の変更に伴い、当初予定していた黒岩涙香については研究を進めることができなかったが、今後の課題にすることとした。

(2)国際的視野に立った森田思軒訳新聞小説／翻訳小説の位置づけ

これまで「新聞小説」という大枠で議論されてきたものについて、とくに思軒を中心とする『郵便報知新聞』における翻訳小説の連載は、当時の通信による国内外の情報（記事や物語）の流通のあり方から「通信小説」として新たに特徴付けし、論じるべきとした。たとえば思軒が翻訳した「炭鉱秘事」(『郵便報知新聞』明治 21/1888 年）は原著不明作ではないが、ヴェルヌの小説 *Les Indes Noires*（1877 年、英訳 *The Child of the Cavern*）をもととし、当時の高島炭鉱労働環境問題に関係する作との指摘がなされている。今回、より詳細に紙面との関係を精査したところ、社説や探訪記事等の報告と内容レベルで対応するよう構成されていること、またそれはストーリー展開、翻訳表現にまで連動しうるよう計算された、高度に編集された翻訳であり、炭鉱労働の理想的形態を描くヴェルヌの作品をこれから日本が向かうべき未来像として読み替えるものであった。本作は、原抱一庵の証言（「吾の昔」等）にあるように、各地の英語授業で紹介され、青年たちに大きな影響を与えた可能性があり、新聞の通信性と連載小説との関係の理想形としてのインパクトを有していたのではないかと考えられる。

(3)森田思軒以降の文学者と新聞編集の関係について考察するための視座の獲得

対象としたのは明治 20 年代を代表し、文学新聞との異名もち尾崎紅葉が社員として活躍した『読売新聞』と、国会開設にあわせて創刊され、幸田露伴が社員として小説を掲載していた新聞『国会』である。

『読売新聞』の尾崎紅葉が積極的に行っていた新聞紙面と小説との連動について、報告者はかつて「三人妻」について論じたことがある。今回は、この時期に、紅葉のそばで学んだ弟子の泉鏡花の創作に着目して考察した。具体的には小説「外科室」(『文藝倶楽部』明治 28/1895 年）の主となる趣向である「魔酔剤」をめぐって、『読売新聞』の幹部にして国会議員だった高田早苗の遭難事件報道と続く雑報記事（「魔睡奇談」）とが、『読売新聞』独自の文脈を生み出していたことを明らかにし、そうした新聞編集が生み出した近代の説話の如き現象を背景に創作されたのが「外科室」であったと位置付けた。

また、『国会』の新聞記事と幸田露伴との関連について、「五重塔」(『国会』明治 24-25/1891-92 年）に焦点をあて、濃尾大地震の震災報道記事との関連を分析した。主筆の末広鉄腸（重恭)、社会記者の野崎左文(城雄)らの社説や震災記事における提言と露伴の小説の連載状況を確認し、連動性を考察した。結果、新聞読者によって、記事という社会的言説と、小説というフィクションとが、相補的に読まれることを露伴が想定していた可能性が高いと判断するにいたった。震災被害をめぐる科学的言説や地震国としての国家をめぐる提言が小説設定や表現と響き合い、震災直後に生きる読者を慰撫し鼓舞するメッセージを発しようとしていたものと考えられる。また「五重塔」は、連載直前において活発化していたシカゴ博覧会開催準備のための記事がその発想のルーツのひとつと考えられること、それに関連する社説等の記事と、露伴が紙上で自身の意見を開陳する美術に関する意見とが、断続的に併行して紙面に現れることで、読者（具体的には国会議員・政事家がイメージされていた）の美術と文学をめぐる認識が更新され、その延長線上に「五重塔」の人物造形や表現、物語展開が創造されていた状況を復元し、検討した。これらから、露伴自身が、新聞編集を多分に意識した小説を創作していたこと、また読者の人文的な意識にまで関与しようとする志向をもっていたことを指摘し、それは日々情報が追加され更新される即時的な新聞紙上の文脈によってはじめて見出せる解釈・評価として、復元すべき対象であることを強調した。

（４）＊追加調査＊森田思軒関連書簡調査について

岡山県笠岡市に寄託されている森田思軒関連書簡のうち、報知社や、編集部関係者の書簡を中心に、撮影・翻刻作業を進めた。また、明治 20 年代に存在した複数の出版社との関連についても現存する書簡から調査できる可能性を見出した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 馬場美佳	４．巻 44
２．論文標題 森田思軒と原抱一庵の翻訳と新聞編輯ーヴェルヌ、ゴーティエ、コリンズ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 稿本近代文学	６．最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mika Baba	４．巻 ACCS2021
２．論文標題 International Circulation of Newspaper Novels: British Empire, Japan, and the Yubin Hochi Shimbun	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Proceedings of 2021 IAFOR(The International Academic Forum)	６．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬場美佳	４．巻 17
２．論文標題 耐震元年の「五重塔」ー濃尾大地震と〈暴風雨〉	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本近代文学館年誌ー資料探索	６．最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 馬場美佳	４．巻 83
２．論文標題 幸田露伴「五重塔」と読者としての政事家たちー新聞『国会』とシカゴ万博ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 文藝言語研究	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 馬場美佳
2．発表標題 泉鏡花「外科室」と〈魔酔〉をめぐる物語 ―『読売新聞』高田早苗遭難事件顛末との関連から―
3．学会等名 泉鏡花研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Mika Baba
2．発表標題 International Circulation of Newspaper Novels: British Empire, Japan, and the Yubin Hochi Shimbun
3．学会等名 The Asian Conference on Cultural Studies（国際学会）
4．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 泉鏡花研究会	4．発行年 2021年
2．出版社 和泉書院	5．総ページ数 236
3．書名 論集 泉鏡花　第六集（内、論文１本担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関